

恐かった恩師とその奥様との 温かい思い出、そして、妻との暮らし



徳井 丞次 *Tokutomi Joji*

副学長(広報担当)/経法学部長/学術研究院社会科学系教授
(経法学部 応用経済学科 教授)

1988年東京大学大学院経済学研究科単位修得満期退学。
1988年信州大学経済学部講師、1990年同大学助教授を経て、
1999年より現職。2015年同大学副学長(広報担当)就任。

【学生へのメッセージ】

この原稿の思い出話で触れている自分の学生時代には、いまの60歳手前の年齢になるのはずっとずっと先のことだと思っていました。いまから振り返ると、40年の歳月が経つのは本当にあっという間でした。そして、その間の社会の変化も大きなものでした。大学の変化もその例外ではありません。日本社会はこれから人口減少局面に入り、こうした状況が今後数十年は確実に続いていきます。いまの学生の皆さんが社会で中心的に活躍している頃には、日本は人口規模の面でもGDP規模の面でも世界中の規模国の立ち位置になっていることと思います。これまでの40年よりも、これからの40年の方が、国際社会で活躍できる人材がより求められるようになることは間違いないことだと思います。

恩師との出会い

私が大学教員という現在の職業を選ぶことになったのは、大学3年生のときに所属したゼミの雰囲気に影響を受けてのことでした。ゼミの恩師は、2年前に亡くなられた宇沢弘文先生です。宇沢先生と始めてお会いしたのは、大学2年生の後期にマクロ経済学の講義を受講したときでしたが、その頃から後に先生のトレードマークになる白いあごひげを生やし始めました。

宇沢先生は、学生の間では「怖い先生」と思われていたと思います。実際、晴天の空がにわかには掻き曇って雷と土砂降り、といった比喩がびつたり瞬間が何度もありました。ゼミの時間に、指名されて黒板の前に立たされた学生がもたもたしているときにも、そうした瞬間があって、叱られた学生は涙が出そうになったことと思います。私自身もそうした瞬間を完全に避け得た訳ではありませんが、むしろ「君そんなことも知らないの」と言ってやさしく教えてもらったことの方をよく覚えています。

宇沢弘文ご夫妻との交流

宇沢先生の奥様にいつどこで最初にお会いしたかは、今となっては思い出せません。ゼミで12月に奥秩父の山に一泊の登山をして、その帰りに宇沢家にどやどやと押しかけたことは覚えています。また、あるときには先生と私ともう一人のゼミ生とで新宿で飲んでいて終電がなくなってしまったことがありました。先生に「一緒にうちに泊まっていけ」と言われて、その晩は先生のお宅に泊めてもらいました。翌朝起きだして台所に行くと、先生が朝ご飯にチャーハンを作ってくれて、奥様が生のオレンジジュースを絞ってくれたことを覚えています。

大学院生になって1年目のときに、ハービッチ先生が宇沢家に4ヶ月滞在して大学で連続講義を担当したことがありました。ある土曜日の午後に突然、私

宇沢先生が「ゼミの学生みんなと最後に一度会っておきたい」と言っていると伝わった。学年が近いゼミ生たちが少人数で集まれば、何回か宇沢先生との晩餐が開かれた。写真はそのうちの1回で、先生のご自宅に近いレストランで。



File
10

ともう一人の学生に連絡があって宇沢家に呼ばれ、ハービッチ夫妻と宇沢夫妻の夕食にわれわれ2人が加わることになりました。宇沢夫妻の2人の息子達はその日は不在で、当時中学生だった娘さんも夕食が終わるころに水泳の部活から帰ってきたと記憶しています。その日は特別豪華な夕食を用意したにもかかわらず、子どもたちが不在でせっかくの食事が余りそうになって、私達に連絡がきたのではないかと推測しています。ただそのおかげで、それから十数年たって米国で再会したときハービッチ先生に顔を覚えてもらったのでした。

ゼミ生のなかには、結婚式の仲人を宇沢先生夫妻に頼んだ人が何人かいます。私が妻と縁あって結婚したときには、そうした華やかなことはしませんでした。宇沢先生の娘さんの結婚披露パーティーに招待されたとき、その招待状に「奥様も一緒に」とありましたが、妻を同伴することはできませんでした。

何年か後に宇沢夫妻を松本にお招きすることがあって、わが^{ろうおく}陋屋にも来てもらって食事をしたことがありました。そのとき妻は米国出張中で、妻が作って冷凍しておいた水餃子を食べてはもらいましたが、またもや妻を先生夫妻に紹介する機会は逃しました。宇沢先生ががっかりしていると、奥様が目ざとく本棚に並んでいるアルバムを見つけて、「あのなかに写真があるのでしょ」と言いました。でも、宇沢先生は、本人がいなくてアルバムで写真を見

るのは良くないと答えて、アルバムを開けて見ることはありませんでした。

妻との暮らし

何年か前に、私と妻が続けて科研費の第1段審査(書面審査)を担当したことがありました。私の方は、ずっとのんびりしていて、1月のセンター試験の頃になって、締め切り間際になったところで、徹夜に近い数日を送ってなんとか片づけることができました。

それに対して、妻は12月中にさっさと片付けてしまいましたが、その間中ずっと「いそがしい」と繰り返していました。このように、二人は仕事のやり方も性格も違いますが、補い合っ

●● 仕事の相棒!

名刺



学部長を7年間もやってしまい、その間に集まった名刺です。枚数を数えたことはありませんが、なかなか人に会う機会の多い学部長だったと思います。そのため、仕事の相棒の欄には、名刺入れが相応しいと思いました。